

關口縣令は名尹なり

明治九年、長州における萩の亂が平定して、首領前原一誠以下の徒が獄に繋がれたときの山口縣令は、有名な關口隆吉氏であつた。

關口は資性聰明、殊に慈愛の念に厚く、且事務を裁決すること流るゝが如く、従つて大いに下僚の人望を得た。

前原等がなほ未決獄をつたとき、關口は晝間公務を執つて前原等の取調べに對し職務上一事をも假借することなかつたが、既に其公務を終へて、夜になると、自ら獄裡を訪ねて懇ろに前原等の憂愀を慰め、苟も法に觸れざる限りは何なりと周旋すべし、少しも遠慮なく申出であれ。」と、大いに慰撫する所があつた。

後、甲東は是等の事を聞いて、關口の行動を歎稱して云ふには、「嗚呼、關口は名尹である。余が如きも、若し罪に觸れることもあらば願くば、斯の如き獄裡に繋がれたものである。」と。關口もまた常に甲東に服して居つて、「大久保卿は實に近世の英雄で、また稀代の大宰相である。」と、平生人に語つたといふことである。

關口縣令は名尹なり

一五一

甲東逸話

勝田 孫彌 著

限定五百部復刻

マツノ書店



利通の清談逸話百余を
項目別に集めた「外伝」
七十六年ぶり、初の復刻



大久保家蔵

目次

少壯時代

甲東誕生の地加治屋町
甲東と先世の舊宅
腕白兒
父子老の放任主義
外祖父皆吉鳳徳の奇行
幼時の甲東と南洲
甲東の參禪
甲東の遠力
父子老の遠島
甲東の孝心
甲東初めて絹衣を着る
甲東の親切と機智
相撲好

勤王時代

甲東と孤島における西郷南洲
甲東の一言脱藩の志士を留む
甲東と僧乘願
甲東南洲と死を計る
甲東一藏様となる
甲東錦を着て間道を往來す
南洲甲東と自己とを對評す
甲東と村田經芳男
京都石藥師の寓居
征長の出兵事件と甲東
甲東品川彌二郎氏と岩倉具視公を訪ふ
大山巖公京都石藥師の懷舊談
甲東等密かに錦旗を調製す
王政復古斷行の日における甲東
湊川における楠公の決心を期したる甲東
松平慶永侯の甲東觀
大久保は議論の仕悪い人である
甲東空前の痛快事
甲東と上村彦之丞男
伊東元帥の甲東談
甲東岩倉具視公の言に感じて

軍事參謀を罷む
初めて拜謁を賜はり甲東感泣す
戊辰の秋聖上還幸に供奉しての述懐

在朝時代 上

甲東人才を拔擢して歐米に留學せしむ
甲東と西園寺公望公
甲東斷髮して參朝す
松方公の首甲東の爲に繋がる
甲東と元田永孚男
甲東と中江篤介氏
甲東規模恢廓の四字を書いて饑別となす
泉州濱寺の記念碑
歐洲巡歴中のことども
冷血と溫血
甲東と大倉喜八郎男
寥々たる短章征韓の擧を覆へす
青木周藏子の甲東談
佐賀の亂と甲東
余は唯天命の加護に據らん
甲東と靜定の工夫
目的は平和にあり
甲東と李鴻章
臺灣における甲東
甲東と大博士ボアソナード
甲東無用の言を弄することなし
洋行後の甲東

在朝時代 下

甲東の人才登用
甲東の足音内務省を肅然たらしむ
甲東都々逸を解す
周到綿密なる甲東
甲東の兩面
熱湯の器を捧持して行くが如し
弄花官吏を免職す
甲東は専制主義の人ではない

楠公父子と甲東

明治天皇甲東の邸に行幸あらせらる
關口縣令は名尹なり
甲東とドクトル、ジョン、シリ、ペリー

甲東部下の才幹を信任す

甲東の服膺せる格言
甲東と駒場農學校
甲東と老農船津傳次平
甲東と東京三田育種場
内務卿の室は神聖である
甲東と佐々木長淳氏
那須野原
その居より改めよ
暴風の海上にて甲東座禪三昧に入る
明天子上に在り
甲東の英斷朝鮮の飢餓を救ふ
甲東西郷隆盛傳の編成を企て、果さず
甲東と實業教育
甲東と岩崎彌太郎氏
金原明善の熱誠と甲東の果斷
飛電甲東の墓に到る
甲東と小西郷
地方官會議における松菊と甲東
伊藤博文公甲東が歸縣して南洲を説かんとするに反對す
甲東の清廉
國本培養と起業公債
郡山市と猪苗代湖の疏水
甲東大觀細論の四字を
松方正義公に贈す
大隈重信侯の甲東觀
甲東の精力

渡邊國武子の甲東觀

山本權兵衛伯の維新先輩談
明治年間唯一の大宰相
甲東よく大隈重信川路利良の間を調和す
甲東の世に傑出する所以
甲東と河島醇氏
即今の豪傑は五十歩百歩のみ
奈良原繁男甲東に呪まる
甲東の絶筆を掲げ其偉靈を祭る

家庭

甲東と家庭 甲東の用意周到
甲東の好物 遊獵の妙味を悟る
多年の經驗上より了得したる妙所 甲東の慈愛
付録
濟世遺言 甲東年譜
復刻に寄せて
曾孫・大久保利泰

復刻に寄せて

■本書は読みやすく含蓄のある「大久保利通エピソード集」です。これまでのイメージとは違う彼の実像を知ることが出来ます。さらに深く知るためには「大久保利通伝」が最適です。
■本書巻末の「復刻に寄せて」で曾孫・大久保利泰氏は「大久保にはまだまだ整理すればこの続編が出来るぐらいの資料はある」と書いておられます。とても楽しみです。ね。
■本書の装丁は女流装幀家・毛利一枝さんにお願ひし、大久保家の家紋を使った斬新なデザインとなっております。これもご期待下さい。

■体裁 A5判上製箱入 三六〇頁

■定価 七千円(税・送料)

■予約特価 五千円(同)

■予約締切 平成十六年五月末(厳守)

■発売 平成十六年七月中旬(予定)

■限定五百部復刻

周南市銀座一の二三
☎〇八三四〇二九五
マツノ書店

「甲東」とはいうまでもなく、維新三傑の一人、大久保利通の雅号である。鹿兒島城下を流れる甲突川の東べりにある加治屋町が大久保の揺籃の地だったことにちなんでいる。

本書は、その雅号を冠しているだけに、他の正統的な伝記や概説書の体系的な叙述とは趣が異なり、甲東の人となりや素顔を印象深く描写することに重点が置かれている。甲東をよく知る人々の証言を交えながら、平易な文章で綴られており親しみやすい。

著者勝田孫弥は甲東と同じ薩摩の人で、大著『大久保利通伝』を著したことで知られ、実証的な甲東研究の先鞭をつけた人である。勝田は甲東の「清談逸話」を永年収集していたが、本

勤王時代

甲東と孤島における西郷南洲
甲東の一言脱藩の志士を留む
甲東と僧乗願
甲東南洲と死を計る
甲東一藏様となる
甲東錦を着て間道を往來す
南洲甲東と自己とを對評す
甲東と村田經芳男
京都石薬師の寓居
征長の出兵事件と甲東
甲東品川彌二郎氏と岩倉具視公を訪ふ
大山巖公京都石薬師の懷舊談
甲東等密かに錦旗を調製す
王政復古斷行の日における甲東
湊川における楠公の決心を期したる甲東
松平慶永侯の甲東觀
大久保は議論の仕悪い人である
甲東空前の痛快事
甲東と上村彦之丞男
伊東元帥の甲東談
甲東岩倉具視公の言に感じて

冷血と温血

甲東と大倉喜八郎男
寥々たる短章征韓の擧を覆へ
す
青木周藏子の甲東談
佐賀の亂と甲東
余は唯天命の加護に據らん
甲東と静定の工夫
目的は平和にあり
甲東と李鴻章
臺灣における甲東
甲東と大博士ボアソナード
甲東無用の言を弄することなし
洋行後の甲東
在朝時代 下
甲東の人才登用
甲東の足音内務省を肅然たらしむ
甲東都々逸を解す
周到綿密なる甲東
甲東の両面
熱湯の器を捧持して行くが如し
弄花官吏を免職す
甲東は専制主義の人ではない

に入る

明天子上に在り
甲東の英斷朝鮮の飢餓を救ふ
甲東西郷隆盛傳の編成を企て、果さず
甲東と實業教育
甲東と岩崎彌太郎氏
金原明善の熱誠と甲東の果斷
飛電甲東の墓に到る
甲東と小西郷
地方官會議における松菊と甲東
伊藤博文公甲東が歸縣して南洲を説かんとするに反對す
甲東の清廉
國本培養と起業公債
郡山市と猪苗代湖の疏水
甲東大觀細論の四字を
松方正義公に贈す
大隈重信侯の甲東觀
甲東の精力

濟世遺言 甲東年譜

復刻に寄せて
曾孫・大久保利泰

■本書は読みやすく含著のある「大久保利通エピソード集」です。これまでのイメージとは違う彼の実像を知ることが出来ます。さらに深く知るためには「大久保利通伝」が最適です。
■本書巻末の「復刻に寄せて」で曾孫・大久保利泰氏は「大久保にはまだまだ整理すればこの続編が出来るぐらいの資料はある」と書いておられます。とても楽しみですね。
■本書の装丁は女流装幀家・毛利一枝さんにお願ひし、大久保家の家紋を使った斬新なデザインとなっております。これもご期待下さい。

■体 裁 A5判上製箱入 三六〇頁
■定 価 七千円(税・共)
■予約特価 五千円(同)
■予約締切 平成十六年五月末(厳守)
■発 売 平成十六年七月中旬(予定)
■限定五百部復刻
周南市銀座三の二三
☎〇八三四〇二一九五
マツノ書店

甲東の姿を印象深く描写

作家 桐野作人



「甲東」とはいうまでもなく、維新三傑の一人、大久保利通の雅号である。鹿兒島城下を流れる甲突川の東べりにある加治屋町が大久保の揺籃の地だったことにちなんでいる。
本書は、その雅号を冠しているだけに、他の正統的な伝記や概説書の体系的な叙述とは趣が異なり、甲東の人となりや素顔を印象深く描写することに重点が置かれている。甲東をよく知る人々の証言を交えながら、平易な文章で綴られており親しみやすい。
著者勝田孫弥は甲東と同じ薩摩の人で、大著『大久保利通伝』を著したことで知られ、実証的な甲東研究の先鞭をつけた人である。勝田は甲東の「清談逸話」を永年収集していたが、本書はその五十年祭を記念して上梓したものである。

私はだいぶ前に本書を読んだが、非常に印象的で記憶に残っているエピソードがある。それは内務省が創設された頃で、甲東が朝出仕し廊下にその靴音が響いただけで、官人たちの雑談や笑い声などがびたりと止み、省内が水を打ったように静かになったという一節である。甲東の威厳と統制力を示して面目躍如たるものがある。もともと、このようなエピソードは一般には親しまれにくいし、事実、甲東に対しては「冷徹」「官僚主義の権化」「有司専制」という非難が浴びせられた。

ところが、本書を読めば、そのような非難は表面的であることがよくわかる。たとえば、旧幕臣で甲東を「冷血」と評し、相性が合わないことを公言していた福地桜痴さえ甲東の警咳に接してのち、「政治家としては最上の冷血たるに似ず、個人としては、懇切なる温血に富んでゐられた」と証言する。また自由民権運動の理論家、中江兆民が若い頃、甲東の馬車に直訴嘆願して洋行の願いを叶えられ、甲東が国家のために広く人材を求めていたとして感動を隠していない。甲東に兄事した大隈重信も甲東の偉大さは「藩閥的偏見に超脱してゐた点」にあったと強調している。

今回この拙文を書くにあたり再読してみても、改めて気づかされた点があった。甲東の内務卿時代の部下だった渡辺国武(のち大蔵大臣)が甲東の生涯を二つの段階に分けて論じた部分である。維新にその画期を求めるのがふつうだと思うが、渡辺が岩倉使節団随行をもって前後に分けていたことに、思わずハツとしたのである。やはり欧米視察が甲東の国家観や経綸に重大な影響を与えたのだと感じさせられた。

ほかに、甲東の意外な一面をうかがえる逸話を二つ挙げておきたい。西南戦争の渦中、折から飢饉に苦しむ朝鮮国が支援を要請してきたとき、要路の多くが艦船はすべて軍需に徴用して余裕がないと反対するなか、甲東は大倉喜八郎に命じて瓊浦丸を調達させ、米を満載して釜山に運んだという。また甲東は狩猟を好んだ。閑暇を見つけては川村純義・吉井友実・西郷従道らと獵銃を担いで近傍の山に入った。西郷南洲が狩猟を趣味としたことは人口に膾炙しているが、甲東もその点では似ていたといえる。

『甲東逸話』の復刻を喜ぶと共に『大久保利通伝』と併読されることをお勧めしたい。

南洲甲東と自己とを對評す

南洲は嘗て甲東の人と爲りと自己の性情とを對比して云ふた、若し一個の家屋に譬ふれば、われは築造することにおいて遙に甲東に優つて居ることを信ずる。然し、既に之を建築し終りて、造作を施し室内の裝飾を爲し一家の觀を備ふるまでに整備することに於ては、實に甲東に天稟あつて、我等の如き者は雪隠、鹿兒島の方言せつちん、便所の隅を修理するも尙ほ足らないのである。然しまた一度之を破壊することに至つては甲東も乃公に及ばない」と。

英雄を知る者は英雄である。この話を深く味つて見ると、兩雄の面目が眼前に髣髴たるを覺えしめるのである。

伊地知貞馨の日記に次の如くいうてある。安政の頃伊地知は、西郷南洲と共に江戸にあつて、天下の志士と交はり國事を畫策してゐた。

伊地知は西郷に向ひ、大久保の東上を促しては如何といつたところ、西郷がいふには、大久保は予の畏友で實に予の手駒である。予若し事に死することあらば予

關口縣令は名尹なり

明治九年、長州における萩の亂が平定して、首領前原一誠以下の徒が獄に繋がれたときの山口縣令は、有名な關口隆吉氏であつた。

關口は資性聰明、殊に慈愛の念に厚く、且事務を裁決すること流るゝが如く、従つて大いに下僚の人望を得た。

前原等がなほ未決獄にをつたとき、關口は晝間公務を執つて前原等の取調べに對し職務上一事をも假借することなかつたが、既に其公務を終へて、夜になると、自ら獄裡を訪ねて懇ろに前原等の憂愀を慰め、苟も法に觸れざる限りは何なりと周旋すべし、少しも遠慮なく申出であれ」と、大いに慰撫する所があつた。

後、甲東は是等の事を聞いて、關口の行動を歎稱して云ふには、嗚呼關口は名尹である。余が如きも、若し罪に觸れることもあらば願くば、斯の如き獄裡に繋がれたものである」と。關口もまた常に甲東に服して居つて、大久保卿は實に近世の英雄で、また稀代の大宰相である」と、平生人に語つたといふことである。